

# 幼児期後期の子どもをもつ母親の育児困難感と育児に対する 自己効力感, ソーシャルサポートの関連

Relationships among Difficulties of Child Rearing by Mothers with Childhood  
Later Stage Children, Their Self-efficacy and Social Support

村井 博子<sup>1)</sup>\*, 流郷 千幸<sup>1)</sup>  
Hiroko Murai, Chiyuki Ryugo

キーワード 幼児期後期, 母親, 育児困難感, 自己効力感, ソーシャルサポート

Key Words childhood later stage, mothers, difficulties of child rearing, self-efficacy, social support

## 抄 録

**目的** 幼児期後期の子どもをもつ母親の育児困難感とソーシャルサポート, 育児に対する自己効力感の関連を明らかにする.

**方法** A 県内における保育園・幼稚園に通園する子どもの母親198人を対象に無記名自記式質問紙調査を行った.

**結果** 分析対象は回答が得られた80人(回収率40.4%)のうちの79人(有効回答率98.7%)であった. 子ども総研式・育児支援質問紙の判定基準により育児困難感が高いと判断された母親は20%であった. 育児困難感とソーシャルサポートに関連がみられ,「地位のサポート」を認識しない母親は育児困難感が高かった. また, 育児困難感と育児に対する自己効力感に関連がみられ, 育児困難感の高群は育児に対する自己効力感が低かった.

**考察** 幼児期後期の子どもをもつ母親の育児困難感を軽減するためには, ソーシャルサポートの「地位のサポート」である子育てに対して褒められたり認められることが育児に対する自己効力感を高めることにつながると考えられた.

1) 聖泉大学看護学部看護学科 School of Nursing, Seisen University

\* E-Mail murai-h@seisen.ac.jp

## I. 緒 言

近年、少子化、核家族化、地域社会の希薄化などで母親を取り巻く環境は大きく変化し、様々な要因が影響して孤立した子育てをする母親は増えている。「健やか親子21」の最終評価では子どもの心の安らかな成長と育児不安の軽減に向けて取り組んでいたが、子育てに不安をもつ母親の指数の改善につながっていないと報告されている（厚生労働省、2015）。その後も、厚生労働省は「健やか親子21（第2次）」として、親子を取り巻く温かな環境作りの推進を進めているところである。

育児に対する不安や困難については、先行研究においてさまざまな定義（牧野、1982：川井ら、1994）がされている。川井ら（2001）は、育児困難感について日常の子育てに起因する母親の育児への戸惑いや子どもへの否定的感情および態度からなる心性の心理的困難感とし育児不安の本態ととらえている。これら育児不安は、母親自身の育児に対してのぞむ気持ちが高いと育児に対する不安は低下させるといわれている（山下、2003）。加えて、母親が他者から受けるソーシャルサポートと育児困難感に関連性があることをいわれており、乳児期の子どもをもつ母親は、夫からの労いや情緒的なサポートを受けることで育児満足感が高くなり育児不安が軽減される（藤井、永井、2008）ことが示唆されている。

育児不安に関連する要因に育児に対する自己効力感があり、金岡（2011a）は、育児に対する自己効力感について、育児で直面する経験的な状況、あるいは未経験の新しい状況に遭遇した際に臨機応変に対処できるという確信の程度のことと述べている。乳幼児期の子どもを養育する母親を対象とした研究では、母親の育児に対する自己効力感が育児困難感の低減にも影響すると報告されている。

また、育児困難感（川井ら、2001）、乳児期と幼児期では質的に異なり、乳児期は身体面に重点を置くが幼児期後期は子どもの行動や特性、精神面に質を変えながら遷延することを報告している。しかしながら、乳児期から幼児期前期にかけての子どもを養育する母親の育児不安に関する研究は多数行われているが、幼児期後期の子どもをもつ母親に着目した研究は少ない。

そこで本研究では、幼児期後期の子どもをもつ母親の育児困難感、育児困難感と育児に対する自己効力感およびソーシャルサポートの関連について明らかにする。

## II. 方 法

### 1. 研究デザイン

本研究は、無記名自記式質問紙調査である。

### 2. 調査対象者

A市内の保育園・幼稚園に通園している4歳から6歳の子どもを養育している母親。

### 3. 調査期間

2018年11月～2018年12月。

### 4. データ収集方法

質問紙調査の依頼にあたっては、保育園及び幼稚園の施設長に研究の意義、目的、方法について文書を用いて口頭で説明を行った。施設長の承諾が得られた施設には、対象者に研究依頼文と質問紙および返信用封筒の配布を依頼した。研究依頼文には、研究目的・意義、調査協力をしなくても不利益にはならないことを記載し、回答後、各自で投函していただくよう記載した。

### 5. 調査内容

#### 1) 属性

母親の年齢、就業状況、家族構成、子どもの数、調査対象の子どもの年齢、性別についてたずねた。

#### 2) 育児困難感

育児困難感（川井ら（2001）が作成した3歳から6歳児用の「子ども総研式・育児支援質問紙」（日本子ども家庭総合研究所）を用いて測定した。この尺度は、「育児困難感Ⅰ（11項目）」「育児困難感Ⅱ（7項目）」「夫・父親の役割問題（16項目）」「Difficult Baby（7項目）」「母親の抑うつ傾向（7項目）」「家庭機能の問題（7項目）」「夫の心身の不調（7項目）」の7領域62項目で構成されている。「育児困難感Ⅰ」は母親の育児への戸惑い・自信のなさに関することであり、「育児困難感Ⅱ」は子どもに対するネガティブな感情や攻撃・衝動性に関する内容である。本研究は、「育児困難感Ⅰ」と「育児困難感Ⅱ」の領域を主に育児困難感の評

価とすることにした。1～4点のリッカートスケールで回答を求め、総得点数が高いほど育児困難感が高くなる。

### 3) 育児に対する自己効力感

金岡 (2011a) が作成した「育児に対する自己効力感尺度」を用いる。この尺度は、13項目で構成されており得点が高いほど育児に対する効力感が高くなる。1～5点のリッカートスケールで回答を求める。

### 4) ソーシャルサポート

渡辺が Wills (1985) の考えに従って作成したソーシャルサポートを使用し、研究者の了解を得て育児に応じた内容の質問項目を作成した。ソーシャルサポートは、「情緒サポート」「地位のサポート」「情報サポート」「社会的支援」「モチベーションのサポート」の5つで、ソーシャルサポートを受けているかどうかの有無を二者択一でたずね、有りの場合、誰からのサポートを受けているかを選択してもらった。

## 6. 分析方法

統計処理には、IBM の統計解析ソフト SPSS for windows Ver.21日本語版を使用した。

統計的手法については、育児困難感高・低群と母親の就業の有無、子どもの性別、家族構成、ソーシャルサポートの関係について  $\chi^2$  検定、育児に対する自己効力感の比較には Mann-Witney U 検定を実施した。それぞれの危険率 5% 以下を有意差ありとする。

## 7. 倫理的配慮

本研究は聖泉大学人を対象とする研究倫理委員

会の承認（承認番号018-009、承認日2018年10月31日）を得て実施した。調査については、幼稚園、保育園の各施設長に研究の趣旨および収集方法などについて文書および口頭で説明を行い質問紙の配布の承諾を得た。研究対象者には、質問紙とともに研究の趣旨および方法、個人や施設の匿名性の確保、調査への協力は自由意思によるものであること、回答の有無により不利益を受けないこと、データは厳重に保管すること等を文書にて説明した。また、質問紙の返却をもって対象者からの調査協力の同意が得たものとするを記載した。

## III. 結果

A 市内の保育園・幼稚園に通園中の4歳から6歳の子どものもつ母親198人に調査票を配布し、80人から回答を得た（回収率40.4%）。そのうち、回答に記入漏れがあった母親1人を除外し、79人を分析対象とした（有効回答率98.7%）。

### 1. 対象者の背景

母親の平均年齢は  $37.0 \pm 4.4$  歳、平均子ども数は  $2.1 \pm 0.7$  人、子どもの平均年齢は5歳2ヵ月、子どもの性別は、男児33人 (41.7%)、女児46人 (58.3%) であった。

母親の就業状況については専業主婦19人 (24.1%)、フルタイム勤務31人 (39.2%)、パート勤務23人 (29.1%)、その他6人 (7.6%) であった。

家族構成については、核家族71人 (89.8%)、夫の親と同居4人 (5.1%)、自身の親と同居4人 (5.1%) であった。

表1 対象者の属性

		n=79		
母親の年齢	(歳)	37.0	±	4.4
子どもの数	(人)	2.1	±	0.7
子どもの年齢	(歳)	5.2	±	0.3
子どもの性別	男児	人 (%)	33	(41.7)
	女児	人 (%)	46	(58.3)
就業状況	専業主婦	人 (%)	19	(24.1)
	パート・アルバイト	人 (%)	23	(29.1)
	フルタイム勤務	人 (%)	31	(39.2)
	その他	人 (%)	6	(7.6)
家族構成	核家族	人 (%)	71	(89.8)
	夫の親と同居	人 (%)	4	(5.1)
	自身の親と同居	人 (%)	4	(5.1)

## 2. 育児困難感がある母親の割合

子ども総研式・育児支援質問紙の判定基準を用いて育児困難感のランク分けを行った結果、育児困難感が高い母親は、16人（20.0%）であった。その内訳は、『育児困難感Ⅰがランク5と育児困難感Ⅱともにランク5』が2人（2.5%）、『育児困難感Ⅰがランク5』が3人（3.7%）、『育児困難感Ⅱランク5』が1人（1.2%）、『全領域中ランク4が4領域以上』が10人（12.6%）であった。

## 3. 育児困難感と属性・育児に対する自己効力感・ソーシャルサポートとの関連性について

### 1) 属性との関連

育児困難感が高いと判定された母親を高群としそれ以外を低群とした。育児困難感高群と低群について、母親の就業の有無、子どもの性別、家族構成の関連性をみたがみられなかった。

### 2) 育児困難感と育児に対する自己効力感との関連

育児困難感の高群と低群による育児に対する自己効力感の関連を検討した。育児に対する自己効力感の平均は $46.65 \pm 7.08$ 点であった。育児困難感高群の育児に対する自己効力感の中央値は $42.63 \pm 8.26$ 点、低群 $47.67 \pm 6.42$ 点であり、有意差（ $p=.008$ ）が認められ、育児困難感の高い母親は

育児に対する自己効力感が低かった。

### 3) 育児困難感とソーシャルサポートとの関連

育児困難感の高群・低群と5つのソーシャルサポート有無との関連性を検討した。地位のサポートである「褒められたり認めてくれる人がいますか」のみに有意差（ $p=.012$ ）が認められた。母親は誰からのサポートを受けているかの認識については、どのサポートも同じ傾向で、一番は夫で次いで実母に友人、義母や園の先生であった。内訳については、表5の通りである。

## IV. 考 察

### 1. 育児困難感の実態

本研究において、幼児期後期の子どもを養育する母親の育児困難感が高いと判断された者は20.0%であった。川井ら（2001）が3～6歳をもつ母親を対象に行った調査結果の13.1%と比較すると本研究の方が高かった。川井ら（2001）の研究は15年程前であることと、同質問紙を用いた幼児期後期を対象とした研究結果が見当たらないため比較は難しいといえる。宮木ら（2003）は、育児不安を高くしている原因は、核家族世帯の増加により子育てを母親のみで行う機会を多くし育児負担が増えていることだと報告している。これらのことから、2000年頃の核家族世帯数の割合は

表2 育児困難感と属性との関連 n=79

		育児困難感高群 (n=16)		育児困難感低群 (n=63)		p値
		人	( % )	人	( % )	
就労	有	15	( 18.9 )	45	( 57.0 )	.062
	無	1	( 1.3 )	18	( 22.8 )	
家族形態	核家族	15	( 18.9 )	57	( 72.2 )	.681
	非核家族	1	( 1.3 )	6	( 7.6 )	
子どもの性別	男	6	( 7.6 )	27	( 34.1 )	.698
	女	10	( 12.7 )	36	( 45.6 )	

$\chi^2$ 検定

表3 育児困難感と育児に対する自己効力感との関連 n=79

		育児困難感高群 (n=16)		育児困難感低群 (n=63)		p 値
		中央値(±標準偏差)		中央値(±標準偏差)		
育児に対する 自己効力感	46.65(±7.08)	42.63 (± 8.26)		47.67 (± 6.42)		.008

Mann-Whitney U検定

表 4 育児困難感とソーシャルサポートとの関連 n=79

		育児困難感高群 (n=16)		育児困難感低群 (n=63)		p値
		人	( % )	人	( % )	
情緒サポート	受けている	16	( 20.3 )	63	( 79.7 )	.405
	受けていない	0	( 0.0 )	0	( 0.0 )	
地位のサポート	受けている	11	( 14 )	58	( 73.4 )	.012
	受けていない	5	( 6.3 )	5	( 6.3 )	
情報サポート	受けている	16	( 20.3 )	63	( 79.7 )	.407
	受けていない	0	( 0.0 )	0	( 0.0 )	
社会的支援	受けている	14	( 17.7 )	59	( 74.7 )	.971
	受けていない	2	( 2.5 )	4	( 5.1 )	
モチベーションのサポート	受けている	15	( 93.7 )	56	( 88.8 )	.565
	受けていない	1	( 6.3 )	7	( 11.2 )	

$\chi^2$ 検定

表 5 母親が認識するソーシャルサポート(複数回答)

	情緒サポート (n=79)		地位のサポート (n=79)		情報サポート (n=79)		社会的支援 (n=79)		モチベーションのサポート (n=79)	
	人	( % )	人	( % )	人	( % )	人	( % )	人	( % )
夫	63	( 79.7 )	49	( 62.0 )	63	( 79.7 )	57	( 72.1 )	58	( 73.4 )
義父	7	( 8.8 )	7	( 8.8 )	6	( 7.5 )	1	( 1.2 )	3	( 3.7 )
義母	23	( 29.1 )	20	( 25.3 )	24	( 30.3 )	4	( 5.1 )	10	( 12.6 )
実父	18	( 10.1 )	13	( 16.4 )	10	( 12.6 )	8	( 10.1 )	8	( 10.1 )
実母	60	( 75.9 )	39	( 49.3 )	54	( 68.3 )	38	( 48.1 )	38	( 48.1 )
姉妹	27	( 34.1 )	11	( 13.9 )	20	( 25.3 )	15	( 18.9 )	13	( 16.4 )
兄弟	3	( 3.7 )	2	( 2.5 )	2	( 2.5 )	1	( 1.2 )	1	( 1.2 )
友人	56	( 70.8 )	39	( 49.3 )	54	( 68.3 )	46	( 58.2 )	26	( 32.9 )
園の先生	38	( 48.1 )	21	( 26.5 )	39	( 49.3 )	6	( 7.5 )	14	( 17.7 )
教育関係者	5	( 6.3 )	4	( 5.1 )	5	( 6.3 )	1	( 1.2 )	3	( 3.7 )
その他	9	( 11.3 )	5	( 6.3 )	6	( 7.5 )	4	( 5.1 )	3	( 3.7 )

約70%であるが、今回の研究対象の核家族の割合は89.8%で約20%近く上昇している。育児困難感と家族形態における有意な差はみられなかったが、育児困難感の高い母親が増加した要因は、宮木ら(2003)と同様で、核家族化で近隣関係の希薄化により孤立した母親が増えたことだと考えられる。

## 2. 育児困難感と育児に対する自己効力感、ソーシャルサポートとの関連について

今回、育児困難感と育児に対する自己効力感との関連では、育児困難感が高い母親は育児に対する自己効力感が低いことが明らかになった。また、

幼児期後期の子どもをもつ母親の育児に対する自己効力感の平均は、 $46.65 \pm 7.08$ 点であった。金岡(2011b)の乳幼児期の子どもをもつ母親を対象にした育児に対する自己効力感の平均は、4ヶ月児をもつ母親では $52.6 \pm 7.0$ 点、1歳6ヶ月児をもつ母親では $52.2 \pm 8.1$ 点、3歳6ヶ月児をもつ母親では $52.0 \pm 7.7$ 点であった。これらの育児に対する自己効力感の平均点を比較すると、幼児期後期の子どもをもつ母親の自己効力感が一番低い可能性が考えられた。今回、育児困難感が高いと育児に対する自己効力感が低いという関連がみられたことから、幼児期後期の子どもをもつ母親は、幼児期前期の子どもをもつ母親より育児困難感が高い



可能性が考えられる。河野、大井。(2014)は、3歳児をもつ母親の育児不安に影響する要因に、「成長発達に関する心配や気がかり」と「しつけに関する心配や気がかり」が関連していたことを報告している。幼児期後期は、幼児期前期の身体面の成長や精神面、しつけに関する心配や気がかりを抱えながら、さらに就学前における学習面に関する不安が増強し、育児に対する自己効力感が低くなっている可能性がある。中川ら(2018)は、幼児期の子どもを育てる母親は子どもの意思を尊重し要求に合わせる傾向は高いが、子どもの自律性や社会性を育むための解決方法を見出し適切に対処していく能力が乏しいことを述べている。これらのことから、育児に対する自己効力感を高めるために、母親が子育てについて悩んだりした時に、同じ年頃の子どもをもつ育児仲間で相談し互いに支えあうことや、育児経験のある身近な母親と話しをすることが必要といえる。

また、今回、育児困難感の高さはソーシャルサポートと関連していることが明らかになり、育児に対して褒められたり認めてもらえているという地位のソーシャルサポートを受けていると認識している母親は育児困難感が低かった。先行研究では、夫が妻の話しを聞き、妻を気遣うなどの情緒面の支援やサポートが高いほど育児困難感が低くなることや育児満足感が高くなることが示唆されている(山口ら, 2014; 藤井, 永井, 2008)。本研究においても同様の傾向がみられた。永井(2019)は、母親の子育てに対するタイプを4つに分け支援を述べている。その中で、子どもとの関わりが多いのにもかかわらず自身の子育てに関する肯定感が低い「子育て不安」タイプの母親への支援は、母親の話しを丁寧に聴きとり、肯定的な評価を与えるといった地位を認めるサポートが必要であると述べている。これらのことから、一番身近な存在である夫や実母、友人などが母親の話しを丁寧にゆっくりと聞き、今までの子育ての労いを態度や言語で表し母親に肯定的な関わりと達成感をもたせることが必要であると考えられる。また、幼児期後期の子どもには、自律に向けた見守りと保護が必要で、母親一人の子育てでは不安や困難感が高くなるため、園の先生や小児医療に携わる医療スタッフや保健師等に気軽に相談でき適切に問題解決できることが重要である。さらには、親子で地元の行政機関の子育て支援に参加し母親

の情緒の安定が図れる支援が必要である。

## V. 研究の限界と課題

本研究は、限られた地域における母親の調査であったため、得られた結果については地域特性を反映している可能性があり、結果を一般化するには限界がある。

今後、調査する地域を拡大し育児困難感の関連因子に関する検討を行うとともに、母親のサポート状況や育児に対する自己効力感を高める支援策を検討していく必要がある。

## VI. 結 語

幼児期後期の子どもをもつ母親の育児困難感とソーシャルサポート、育児に対する自己効力感との関連について、以下の結果が得られた。

1. 幼児期後期の子どもをもつ母親のうち育児困難感の高い母親は2割であり、核家族の増加が育児困難感の高い母親の増加に影響していると考えられた。
2. 幼児期後期の子どもをもつ母親は、育児困難感と育児に対する自己効力感に関連があり、育児に対する自己効力感が高い母親は育児困難感が低い。育児困難感とソーシャルサポートの間では「地位のサポート」に関連がみられ、育児困難感の高い母親は、子育てに対して夫や実母や友人から褒められたり認められることで育児に対する自己効力感が高まり育児困難感が低減する可能性があると考えられた。

本研究における利益相反は存在しない。

## 文 献

- 藤井加那子, 永井利三郎。(2008): 育児期にある母親の育児満足感に影響する因子—子育て不安の認識の有無による違い—, 小児保健研究, 67(1), 10-17.
- 伊吹麻里, 中村歩美, 中野真希, 他。(2004): 核家族における乳幼児期の母親の育児不安—育児不安に影響する人的環境要因—, 藍野学院大学紀要, 18, 106-111.
- 金岡 緑。(2011a): 育児に対する自己効力感尺度(Parenting Self-efficacy Scale, PSE 尺度)の開発と

- その信頼性の妥当性の検討, 小児保健研究, 70 (1), 27-38.
- 金岡緑. (2011b): 乳幼児をもつ母親の生活習慣と精神的健康および育児に対する自己効力感との関連, 日本助産学会誌, 25 (2), 181-190.
- 川井尚, 庄司純一, 千賀悠子, 他. (1994): 育児不安に関する基礎的研究, 日本総合愛育研究所紀要, 30, 27-39.
- 川井尚, 庄司純一, 千賀悠子, 他. (1999): 育児不安に関する臨床的研究Ⅴ－育児困難感のプロフィール評定質問紙の作成－育児不安のタイプとその臨床的研究, 日本子ども家庭総合研究所紀要, 1-15.
- 川井尚, 庄司純一, 千賀悠子, 他. (2001): 子ども総研式育児支援質問紙(ミレニアム版)の利用手引きの作成, 日本子ども家庭総合研究所紀要, 37, 159-180.
- 河野古都絵, 大井伸子. (2014): 3歳児をもつ母親の育児不安に影響する要因についての検討, 母性衛生, 55 (1), 102-110.
- 厚生労働省 (2017): 健康日本21 (第2次) の推進に関する参考資料, [http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/dl/kenkounippon21\\_02.pdf](http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/dl/kenkounippon21_02.pdf), [検索日2019年9月7日].
- 牧野カツ子. (1982): 乳幼児をもつ母親の生活と育児不安, 家庭教育研究所紀要, 3, 34-56.
- 宮木寿子, 木崎智子, 中島涼子, 他. (2003): 乳幼児期における母親の育児問題－乳児期の発育発達と母親の育児問題との関係－, 藍野学院紀要, (17) 124-128.
- 永井知子. (2019): 母親の子育て困り感の実態とその支援についての模索, 小児保健研究, 78 (2), 133-141.
- 中川智子, 星野明子, 志澤美保, 他 (2018): 幼児を育てる母親の養育態度の特徴と育児感情との関連, 77 (5), 469-475.
- 山口咲奈枝, 佐藤幸子, 遠藤由美子. (2014): 未就学児をもつ父親の育児行動と母親の育児負担感との関連, 母性衛生, 54 (4), 495-503.
- 山下美弥. (2003): 乳幼児をもつ母親の育児不安と自我状態－乳幼児期と幼児期の比較を通じて－, The Journal of Nursing Investigation, 1 (1), 10-18.

